

中国知識人研究へのメディア史的アプローチ

—章清『清季民国时期的「思想界」——新型伝播媒介的浮現与読書人新的生活形態』—

比護遙

一 はじめに

中国現代史の重要な担い手である知識人に着目した研究は、思想史を中心に枚挙に暇がない。なかでも、彼らの言論が交わされる場であるメディアにも着目するのが、近年の主要な動向である。メディアという視点を取り入れることにより、個別の言説内容にとどまらず、相互の交流や「公共性」といった課題に接続することも可能になる。

知識人史とメディア史の不可分性については、中国知識人研究を牽引してきた許紀霖による整理が明快である^①。清朝末期、とりわけ一九〇五年の科挙廃止に

相前後して、伝統的な士大夫（読書人）は政治的に周縁化されることとなったが、同時に、言論を武器に文化的影響力を発揮する近代的知识人が登場してきたことはよく知られている。許はこの新旧の知識人の交代を、地縁や血縁といった時間的結合により成り立つ伝統社会から、都市公共空間を基盤とする近代社会への転換という歴史的文脈の中に位置づける。すなわち清末から民国期にかけて出現した近代的知识人を特徴づけるのは、都市における彼らの相互交通の形式であり、そこに生じる批判的な公共性である。そして、知識人社会を形成するネットワークの構成要素として、学校や結社と並んで重要なのは、当時の「ニューメディア」である新

聞や雑誌であった。逆に言えば、メディアの分析は当時の知識人の在り方を知る重要な手掛かりとなるのである。

許とその門下生らによる共同研究『近代中国知識分子的公共交往（一八九五—一九四九）』（上海人民出版社、二〇〇八年）は、許が示した枠組みを実証に移した労作である¹¹⁴。各年代を代表する雑誌の執筆者の属性を分析するなどして、知識人が形成したネットワークを具体的に提示しており、民国末期に至るまでの経時的変化を見通すことができる。

清末における「ニューメディア」の登場と知識人の変容をオーソドックスに記述した著作としては、李仁淵『晚清的新式傳播媒体与知識分子——以報刊出版為中心的討論』（台湾・稻鄉出版社、二〇〇五年）も参考にできる。日清戦争の敗戦を機に、知識人が本格的に新聞や雑誌の発行に参入するようになり、日本や租界を拠点に言論の影響力を拡大させていったことを跡付けている。モノグラフとしては、商務印書館の総合雑誌で穩健中

立の立場を維持した『東方雜誌』を分析した洪九来『寛容与理性——《東方雜誌》的公共輿論研究（一九〇四—一九二二）』（上海人民出版社、二〇〇六年）も、知識人論を視野に入れた完成度の高い研究である¹¹⁵。

英語圏においても、この分野の先駆的研究である Joan Judge, *Print and Politics: 'Shbao' and the Culture of Reform in Late Qing China* (Stanford University Press, 1996) のほか、Rudolf G. Wagner, *Joining the Global Public: Word, Image, and City in Early Chinese Newspapers, 1870-1910* (State University of New York Press, 2007) & Barbara Mittler, *A Newspaper for China?: Power, Identity, and Change in Shanghai's News Media, 1872-1912* (Harvard University Asia Center, 2004) ¹¹⁶ が注目に値する¹¹⁵。

本書評で取り上げる章清『清季民国時期的「思想界」——新型傳播媒介的浮現与読書人新的生活形態』（社会科学文献出版社、二〇一四年）も、この研究動向に位置づけられるものであろう。原題を直訳すると、『清末民国期の「思想界」——ニューメディアの出現と読書人の新し

い生活形態』となる。

著者の章清は復旦大学歴史系の教授であり、中国近現代思想文化史を専門としている。他の主要著作には、『胡適派学人群』与現代中国自由主義（上海古籍出版社、二〇〇四年）^六、『學術与社会』近代中国「社会重心」的轉移与読書人新的角色（上海人民出版社、二〇一二年）などがある^七。

「国家哲学社会科学成果文库」の一つとして出版された本書は、メディアを切り口に清末民国期の社会変動を捉えようとする著者の一連の研究プロジェクトの集大成である。二五〇種以上の新聞・雑誌に加え、日記や書簡、回顧録を渉猟し、上下巻併せて九〇〇頁近くにわたり膨大な史料を引用した庄巻の著作であり、史料集的な利用にも堪えうるものである。

二 本書の問題設定と構成

本書を理解する上での鍵となる「思想界」という言葉は、史料用語であると同時に、ブルデューの「場」の理論を援用した分析概念でもある。すなわち、近代の到来とともにそれまで言及されることのなかった「思想界」の存在が意識されるようになったとき、読書人^八のネットワークが自律的な集合として立ち現れたと言えるのである。そのネットワークを構成する重要な媒介となり、それを可視化するものが、言うまでもなく新聞や雑誌といったメディアである。言論により読書人が相互に結合するとき、帝政期における上意下達的な国家と社会の関係は変化を迫られ、輿論を形成する公共空間が生じることになる。

とはいえ、この変化は一朝一夕に起こったわけではない。当初キリスト教の宣教師や国際通商を担う商人によつて中国にもたらされた西洋のニューメディア、つまり定期刊行を特徴とする新聞や雑誌が、一九世紀末にいたつて読書人にも受容されるようになったことは既に言及した。ただし、この期に至つても、『申報』

などの新聞には皇帝の命令(上諭)が掲載されており、旧来からあった邸報などと呼ばれる官報との連続性を保持していた。「天下道あらば、庶人議せず」という認識が変化するのは容易ではなかったのである。

このような背景のもとで、「思想界」がいつ、いかにして、いかなる性格を持つものとして成立したのかというものが、全巻を貫く問題設定である。そして、従来の多くの研究のように個別のメディアのみに着目するのではなく、同時代のメディア言説を網羅的に取り上げることにより、可能な限り全体性を確保しつつこの問いに取り組んでいるのが本書の最大の特徴である。

上記の問題設定が述べられた「序言」を含め、全体は十章から構成されており、以下に日本語訳した各章の表題を示す。

序言 「場」としての「思想界」…ニューメディアと読書人

第一章 「集団形成」の要求…「思想界」形成の背景

第二章 「思想界」の登場…社会の再編成における「サバルチャー」

第三章 表舞台に出た「思想界」…「思想版図」の開拓

第四章 「思想界」の多重色彩…新聞メディアと学術

第五章 「思想界」の多重色彩…新聞メディアと政治

第六章 書店・新聞・読書人…共同の「ビジネス」

第七章 「思想界」の一面…読書人の表現方式の転換

第八章 新聞を読む…読書人の「出世コース」

結語 「思想界」…清末民国期の「公共輿論」

この目次構成からも明らかのように、本書で取り扱われる論点は実に多岐に及ぶが、本稿では主に以下の三点に整理して要約を試みる。第一に、「思想界」がいかなる経緯で形成されたかについてであり、主に第一章から第三章と対応する。第二に、「思想界」が学術や政治といった関連する領域といかに関わっていたかという「思想界」の内実に関わる点であり、主に第四章と第五章と対応する。第三に、「思想界」の担い手である

読書人の生活や経済的側面に注目するものであり、主に第六章から第八章に対応する。

三 「思想界」の出現

本節では、近代中国において「思想界」がいかかにして立ち現れたかを論じた主に第一章から第三章までの内容を要約する。

そもそも読書人による自律的なネットワークである「思想界」が形成された背景には、それまで「君子党せず」を是としてきた読書人が、社会変動の中での新たな役割を模索する過程で、集団形成を求めるようになってきたことがある。そこでの結節点となったのが、西洋を模倣した学校や学会、そして新聞社(報館)であった。譚嗣同らによる南学会の同人が『湘報』を発行したように、この三者は当然密接に結びついている。

しかも、日清戦争後に急増した新聞は、それぞれ孤立していたわけではなく、互いに連携することにより広

い公共空間を構成していた。そのことが具体的に看取できるのは新聞の発行形態である。梁啓超が主筆を務めた改革派の『時務報』などの主要紙には、他の新聞の創刊の告示も頻繁に掲載されていた。さらに、印刷や販売の面でも相互に依存し、新聞社同士のネットワークが形成された。新聞を発行する読書人たちの個人的人脈がこのことを可能にしていた。

これらの新聞を舞台に政治的言論が展開されたことは、それまで朝廷の中にあつた政治の重心を外へと引き出す機能を果たした。とはいえ既に述べたように、上意下達的な旧式のコミュニケーション形式が即座に転換したわけではない。『時務報』や『中外紀聞』など、一九世紀末に創刊された主要な新聞における言論はいずれも、清朝の存続を前提とする「自改革」の域を出るものではなかった。さらに、皇帝からの上諭が掲載されるいは読書人の意見表明も朝廷に対する陳情の形式で書かれた。上下の垂直的関係を前提とする旧来の常識は、発行者にも読者にも共有されていた。

当局の側も近代化の実現における新聞の重要性を認知し、保護を与えていた。例えば洋務運動の主導者として知られ、各地方の総督を歴任した張之洞は、『時務報』に対して高い評価を与える文章を書き残している。実際に販売面での便宜が図られたり、直接的な経済支援が与えられたりすることも多かった。このように密接な関係にある以上、言論の内容も自己規制を迫られる。また、当局自らが「官報」を発行することも広く見られた。

とはいえ、新聞が政府と衝突することもなかったわけではない。とりわけ一八九八年の戊戌の政変以降、新聞社への統制が強まった他方で、日本への亡命者や留学生らによって作られた新聞には、より過激な言論が現れるようになった。梁啓超が日本に亡命後に作った『清議報』にも、皇帝の上諭はもはや掲載されていない。これら日本で発行された新聞は、上述した相互依存的な販売網を通じて、中国国内でも広く流通していた。このように清末期は、古いコミュニケーション形式が存

続しつつも、新しいものが発展しつつある過渡期として位置づけられるのであった。

こうした経緯で徐々に姿を現し始めた「思想界」の存在は、「思想界」という言葉そのものの出現からも確認できる。そもそも、元来仏教語である「世界」を転用し、「文学界」や「芸術界」などとして表現する用法が生まれたのは明治期の日本であった。日清戦争後の日本への留学生を経由して、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、中国語でもこの「世界」という表現が使われ始めるようになる。当初は「省界」、すなわち同郷意識による連帯が中心であったが、徐々に出身地の違いを超え、知識階層としての共通のアイデンティティが生まれるようになった。

そして、「思想界」への自己言及が行われるようになるのと同時に、その公共性についての自覚も生まれるようになった。近代的な国家意識を背景に、新聞が「公共輿論」を代表するとする言説が出現したのもこの時期である。その自覚は政府批判にもつながり、読書人が

統治を脅かす存在として認知されるようになった。かつて新聞を称揚した張之洞も、戊戌の政変後は激しい新聞攻撃を行っている。

清末期においてはなお階層的・地域的な限界があった新聞の流通も、民国期に入ると大幅な拡大を遂げ、それに伴い影響力も増した。「思想界」の实在は自明の前提とされ、「思想界」の代表人物は誰かを議論するような言説も頻出した。また、大学制度の確立とともに大学の教員や学生が言論の担い手の中心となり、「思想界」が「学术界」や「教育界」と近接するようになったのも民国期の特徴である。

四 「思想界」と政治・學術

前節において「思想界」の輪郭がいかに現れたかというどちらかといえば外形的な側面に注目したのに対し、本節では「思想界」の内容に立ち入った議論を概観する。このとき、政治および學術との関係性が最も重要な論

点となる。なお、本書の主に第四章と第五章に対応する。全体的な傾向としては、中国の「思想界」は學術志向が非常に強かったといえる。そもそも中国に新聞・雑誌が紹介された当初から、西洋の学問を伝える媒介として重視されていた。「学報」を自称する新聞も多数存在し、「二学あらば、即ち一報あり」とさえ称された。この「西学」重視の傾向は、科挙制度の最末期において難解な八股文の試験を廃止し時事論説を重視する制度変更が行われたことにより、加速される。

民国期に入つて大学が発展すると、新聞・雑誌と密接に結びつくようになる。その最も顕著な例が新文化運動を主導した『新青年』であろう。同誌が広範な読書人に認知されるようになったのは、編集長の陳独秀が北京大学文科学長になつてからである。このほかにも『新潮』や『少年中国』など大学に近い雑誌は多く、商務印書館の『東方雜誌』のような一般の総合雑誌でさえ強い学術的色彩を帯びていた。

このような學術との強い近接性に比すれば、政治と

の関係は複雑な様相を呈している。民国成立直後こそ、政党活動の流行に伴い政論誌が多く現れたが、一九一八年以降の新文化運動期には大学人による思想・学術的内容を主眼とする雑誌に取って代わった。この背景には辛亥革命の挫折を経た読書人の政治への失望がある。胡適が「二十年は政治を談ぜず」と表明したのは有名だが、この思いは他の読書人にも共有されていた。伝統的な「字は政より高し」という認識も相まって、「思想界」の「非政治化」は進展した。『東方雜誌』や『独立評論』『觀察』など、「公共論壇」を自称する雑誌において特にその傾向は顕著であり、特定の政治的立場から距離を置いた。

とはいえ、このことは読書人が政治に無関心になったことを意味するものではない。そもそも胡適らの認識は政治からの離反を意味するものではなく、より根源的な思想を確立することにより政治を超越することを目指すものであった。そのうえ、「思想界」が「公共性」を帯びたものである以上、政治と無関係であること

は不可能だった。

清末における「学戦」が「西学」をめぐる純粋な学術的論争であったのに比べると、民国期の社会認識をめぐる「思想戦」は必然的に政治性を帯びる。読書人同士が派閥を形成し、「我々」と「彼ら」を区別して語る言説が表れるようになった。そしてこのような思想的分断は、一九二〇年代ごろにかけて、社会主義や自由主義などの「主義」の対立として先鋭化する。五四運動後の『新青年』や少年中国学会の分裂は象徴的である。

政治勢力の側も新聞を政治動員のための不可欠な道具であるとみなすようになった。新聞を自ら発行することもあったほか、新聞社に意見表明の電報を送り、公衆に主張を訴える手段とすることも一般的であった。なかでも、イデオロギー政党である国共両党が、新聞による動員を特に重視したことは言うまでもない。

五 「思想界」のインフラストラクチャー

本節では、本書の主に第六章から第八章に対応する「思想界」を成立せしめた経済的構造や、担い手である読書人の生活形態について論じた部分を要約する。「執筆から出版まで、印刷から流通まで、販売から閲読まで、そして作者、出版者、読者にいたるまで」（七八三頁）という多様な結節点に満遍なく目を配った記述がなされている。

初期における新聞の販売が読書人の個人的な人脈関係に依存しており、新聞社が相互に販売や印刷を請け負っていたことは既に述べた。新聞発行の経済的側面を考えるうえで、これに並んで重要なことは、しばしば書籍の出版と結びついていたことにある。新聞と書籍は同じ設備で印刷ができることに加え、新聞に書籍の広告を掲載できることも利点であった。科挙の制度変更や学校制度の整備により書籍の需要は高まっていき、「ビジネス」として成立するようになった。

このことは当然読書人の生活にも影響を与える。すなわち、科挙日格により官僚になるという従来の「出世

コース」が無効になった読書人にとって、「売文」により生計を立てるというのが新たな選択肢となった。清末には既に原稿料を払うのが一般的となり、相場感覚も生まれていた。かくして印刷資本主義の成立は、読書人の新たな役割・身分と結びつく。

読書人が旧来の官報に代わって新聞・雑誌を受容するようになった過程も、日記資料等を用いて丁寧に裏付けられている。中央と地方では受容の時期に差があるが、概ねの傾向は同じである。また、新聞の普及にあたっては、新聞閲覧所という装置も重要な役割を果たした。

また、読書人が書く文章における文体の変化への言及もある。科挙制度に読書生活を規定されていた読書人は、かつて専ら八股文と呼ばれる難解な文章のみを書いていた。しかし、新聞の流行により主張を広範な人に伝える必要に駆られるようになると、より簡潔な「報章（新聞）文体」を用いるようになり、さらには白話（口語）により新聞を発行することも行われた。新聞が輿論

を代弁するという意識が定着するようになると、輿論の支持を獲得するために文章が過激化することになり、意図的に嘘を書いたりプライベートを暴露したりすることも行われるようになった。

六 本書の課題

以上の要約からも明らかのように、本書は興味深い論点を多く含んでおり、この研究領域における白眉であることは論を俟たない。とはいえ、今後の研究の進展につなげるためにも、ここでは敢えて二点の問題を指摘しておきたい。

第一に、数多くのテーマに言及している反面、個々のテーマに関する分析は薄く、理論的考察も不十分である。このことは特に、「思想界」と政治の関係を論じた部分に当てはまる。清末民国期の「思想界」が「非政治化」したとしつつ、「思想」の背景には「政治」があったために、結局は「政治」と不即不離の関係にあったと

というのが本書の基本的な立場である。とはいえ、何をもって「政治」とするか の定義が十分になされていないため、曖昧な議論に留まっている。一方で民国期におけるメディアの「非政治化」を指摘しつつ（三五九頁）、別の個所で政治的主張が明確になったことに言及するなど（四一〇頁）、著者自身の中でも混乱があるように見受けられる。また、「結語」においても「公共論壇」を自称する雑誌が「非政治化」していたことを、中国の「公共性」の限界として指摘するが、果たして雑誌が特定の政治的立場をとることが健全な政治論争に資するのだろうかは、議論の余地がある。公共性と政治の関係については、実証的ならびに規範的にさらに検討するべき課題であろう（九）。

第二に、清末から民国期というかなり長いタイムスパンを扱っているが、主要な記述は五四運動期までに集中し、それ以後の展開は断片的な記述に留まっている。しかしながら、都市においては大衆社会化が進展し、政治面では国民党政権による国家統一が進み、さらに

対外的には日本の侵略が進展する一九二〇年代から三〇年代にかけての時期は、公共性の変容も伴っていたことは既に複数の研究が指摘する所である^(二〇)。そこにおいては当然、「思想界」のあり方や読書人の生活形態のさらなる変化が予想される。そのことへの言及がほとんどないことには疑問が残るし、今後さらに探求が深められるべきである。またその際には、一九四九年の中華人民共和国成立以後との連続と断絶も視野に入れる必要があるだろう。

七 おわりに

ここまで本書の問題点を述べてきたが、それにより本書の価値が毀損されるものではない。ただ、本書はメディア史的アプローチによる中国知識人研究の現時点での到達点であると同時に、今後の研究の出発点であると称するべきなのだろう。本書で提示された論点と史料を手がかりに、多方面での研究の展開が望まれる。

最後に、本書の視点は日本を含む諸外国の研究にも示唆を与えるものであることを強調したい。本書のような総合的な視野を持った研究は、中国国内はもちろん、他国においてもあまり類がないのではないか。メディアと知識人の変容を、送り手と受け手、内容にまで目配りしつつ検証する試みは、国際比較の可能性にも開かれていく。

なお、書評では十分に表現しきれないが、本書の大胆な立論は圧倒的な分量の史料の引用に支えられている。それがひとえに著者の膨大な労力によるものであることは言うまでもないが、電子データベースの存在により可能になった研究であることも事実であろう。参考文献表からは、著者が「民国時期期刊全文数据库（一九一一～一九四九）」など九種類のデータベースを駆使していることがわかる。本書の企図を時代や地域を移してさらに進展させることは、データベースの整備が進んだ現在において強く求められている。

① 許紹彝他『近代中国知識分子的公共交往（二八九五—一九四九）』上海人民出版社、二〇〇八年、一一—二頁

② 邦語の書評として、楊翰「書評 許紹彝他共著『近代中国知識分子的公共交往（二八九五—一九四九）』『現代中国研究』第三号、二〇〇八年、一一四—一二〇頁。

③ 邦語の書評として、川尻文彦「書評 洪九来『寛容与理性』」（『東方雜誌』的公共輿論研究（一九〇四—一九三〇）『近きに在りて』第五四号、二〇〇八年、二一九—二二三頁。

④ 邦語の書評として、片柳香織「書評 Barbara Milder: *A Newspaper for China? Power, Identity, and Change in Shanghai's News Media, 1872-1912*」『史林』第八七巻第五号、二〇〇四年、七〇四—七一〇頁。

⑤ これら中国語圏や英語圏における研究動向に比すれば、日本国内の中国研究ではなおこの分野の蓄積は薄いと云わざるを得ない。問題意識を部分的に共有する研究書としては、原正人『近代中国の知識人とメディア、権力—研究系の行動と思想、一九二二—一九二九』（研文出版、二〇二二年）や楊翰『近代中国における知識人・メディア・ナショナルリズム—雑誌と生活書店をめぐる』（汲古書院、二〇一五年）などがある。

⑥ 邦語の書評として、水羽信男「書評 章清『胡適派系天群』与現代中国自由主義』『近きに在りて』第五四号、二〇〇八年、一〇〇—一〇四頁。

⑦ 邦訳された論文として、「中国現代思想史における『自由主義』』『近き

に在りて』第五四号、二〇〇八年、一七一—二二頁。「近代的学科の形成—中国における『日本要素』の出現—貴志俊彦・谷垣真理子・深町英夫編

『模索する近代日中関係—対話と競争の時代』東京大学出版会、二〇〇九年、七九—九八頁、「公共輿論—中国自由主義の表現と実践」村田雄一郎編『リベラリズムの中国』有志舎、二〇一一年、一五—三五頁、「清末西学書の編纂にみえる西洋知識の受容—孫江・劉建輝編著『東アジアにおける近代知の空間の形成』東方書店、二〇一四年、一一三—一三六頁。

⑧ 以下では本書の表記に合わせ、新旧の知識人を名指すとき「読書人の呼称に統一する。

⑨ なお、拙論『読書』のメディア史—文化大革命から天安門事件への読書人的公共性—本誌掲載—においても、一九八〇年代の『読書』が政治から距離を置くことで知識人の公的な交流の場となりえたが、一九九〇年代以降思想的分断に巻き込まれていくことを論じた。このように非政治的であるからこそ公共的であるというパラドックスが中国で繰り返し見られるのはなぜか、また理想的にはどうあるべきなのかは、さらに考察を深めたい問題である。

⑩ 例えば、村井寛志「両大戦間の中国におけるメディア論のポリテクニクス—公共圏概念をめぐる両義性を手がかりに』『思想』第九五七号、二〇〇四年、五五—七二頁、岩間一弘『上海大衆の誕生と変貌—近代新中間層の消費・動員・イベント』東京大学出版会、二〇二二年。